

令和7年度第4回静岡県産業教育審議会 会議録

日時：令和7年9月5日（金）

午後2時から4時まで

場所：静岡県男女共同参画センター501会議室

○事務局（向中野班長）

本審議会は、会議規則の第3条第2項に、委員の過半数が出席しなければ会議を開くことができないとあり、本日の審議会は、12人の委員中現在6人御出席をいただいているので、審議会が成立している。

Ⅰ 教育部中山参事あいさつ

- ・これまで3回の審議会においては、これからの静岡県を担う産業人材を育成するということで、育成した生徒像とその育成に必要な学びの方向性をテーマとして、皆様から活発なご議論をいただいた。貴重なご意見いただき、その全体像は着実に明確になっていると感じている。
- ・本日は、その議論を1歩進めて、そのような生徒像と学びの方向性をさらに明確にするということで、2つの重要な論点について、ご意見を賜りたいと考えている。
- ・まず、1つ目の論点は、生徒像と学びの方向性、これをより具体的に整理し、その内容について、改めて皆様のご意見をいただきたい。
- ・もう1つの論点といたしましては、少子化や社会の変化といった本県が直面する課題を踏まえた上で、魅力的な専門学科等のあり方と専門学校等の適正な整備について、集中的なご議論をいただければと思っている。
- ・特に、これからの産業教育を考える上では、掛け算の発想が非常に重要になると考えている。従来のように、単に特定の分野の専門性を深めるというだけではなく、商業と工業、福祉と農業といった異なる分野の学びを掛け合わせることによって、生徒たちが変化する社会に対応できる、より多角的な視点や能力を身につけることが可能となると考えている。
- ・これは、地域産業や企業のニーズにも応える深い学びの実践であり、ジョブ型雇用にも対応できる専門性の高い学びへと転換していくために不可欠な視点であると思っている。
- ・本県の高校を取り巻く状況が、生徒数が減少、本県だけに限らず日本全体ですが、こちらの生徒数の減少というのは今後急激に進んでいく。これは避けて通ることはできないため、このような中で、生徒1人1人の学びの機会を最大限に保障し、多様な専門性を確保していくためには、それぞれの学校が持つ強みや特色を生かしつつ、新しい姿を模索していく必要がある。
- ・各地域の実情や産業構造を踏まえ、教育の質と持続可能性を両立させるため、この点についても建設的なご意見をお願いしたいと思っている。

2 事務局説明

(1) これまでの審議のまとめ

- ・第3回の議事録については、県教育委員会のホームページに公表している。
- ・第3回審議会では、2つの論点について多くのご意見をいただいたことに感謝する。

(2) 本日の協議について

- ・次第資料4ページ 資料4は、第1回から第3回までの委員の皆様からのご意見を、育成したい生徒像とその生徒像に必要な学びの方向性にまとめている。
- ・次第資料 5ページには、本日の協議テーマを記載している。

- ・資料4の通り、静岡県の特設高校等で「育成したい生徒像」とその必要な学び、方向性が明確になってきた。これらを具現化するために、本日は次の論点について意見をいただきたい。

ア 論点1の説明

- ・「育成したい生徒像」とその必要な学び、方向性が明確になったところを受けて、それぞれの属性を、6ページの資料5のように整理した。
- ・資料5について、過去3回の審議会を振り返って御確認いただきながら、属性と内容について委員の皆様方の御意見いただきたい。属性は、第1回審議会で提示したもので、左側から「審議内容」、「検討の視点」の順に、それぞれの属性に皆様からの意見を振り分けて表にした。

イ 論点2の説明

- ・「育成した生徒像」、「育成した生徒像に必要な学びの方向性」を踏まえて、「これからの時代に対応できる学科改善の在り方と少子化に伴う特設高校等の適正な整備」について、御意見をいただきたい。
- ・御意見をいただく視点としては、委員の皆様方からいただいた学びの方向性を具現化するためにはどのような学科改善を図ることが具現化につながるのか、魅力的な特設高校等にどうしたらなっていくのか、そのような視点でお願いしたい。
- ・学科改善を行う上で、学校の体制整備、いわゆる再編整備等も必要になるかと思う。学科改善や再編等も含めてセットで考える必要もあるかと思うので、そのような視点でご意見をいただいても構わない。

3 協議

(1) 論点①

「育成したい生徒像」とその育成に必要な学び（方向性）のまとめについて

○川田委員

- ・資料5を見ていただき、これまでの議論を振り返っていただき、確認いただきたいです。
- ・委員の皆さんからいただいた意見の反映状況や、不足していること、ニュアンスが違うというようなことをご意見いただければと思います。
- ・審議内容アの(1)職業に必要な知識・技術等の高度化・複雑化への対応の「育成したい生徒像に必要な学び（方向性）」のところについて、御意見があれば発言いただきたいです。

○横田委員

- ・前回も話が出ていましたが、汎用性のある技術という側面に加えて、産業教育という中では技能的な側面が普通科との差別化につながるのではないかと思います。どのような形で入れるのかすぐには思いつきませんが、そういう側面は入れておいた方がよいのではないかと思います。
- ・こちらに書いてあることも非常に重要なことですが、今、普通科でもDX化に対応できる人材を育成していこうということもありますので、産業教育という中でそういう特徴を出してもいいのかなという気はしました。

○川田委員

- ・審議内容アの(1)に、「柱となる専門性を身につけた人材」と書かれているが、横田委員がお話されたことについて、どのような言葉を足せばよいのか、コメントをいただけるとありがたいです。

○横田委員

- ・具体的に今すぐ思いつかないところもありますが、デジタルではなく工業でいったら機械的な、農業でいったら直接作物に触れ合うような、手作業的な部分ということになるのだと思います。そういう部分を特徴としては入れ込んでもいいのかと思います。

○村木委員

- ・「育成したい生徒像」のところに十分すぎるくらい書いてあるとは思いますが、もし付け加えられるのであれば、審議内容イ「(3)グローバル化への対応」のところで、異文化への対応や理解の前に、自己理解をしていないと多分できないと思うので、自己の理解あるいは自文化への理解が入ってもいいのではないかと思います。
- ・もしかしたら審議内容イ「(1)地域産業の継承と創造」に書かれている「静岡県や地域産業への愛着」のところに入ってくるのかもしれないが、外ばかりではなくて、自分を理解した上でグローバル化に対応するというニュアンスが入ってくるといいのかなと思いました。

○岸田委員

- ・「育成したい生徒像に必要な学び(方向性)」を読んでもみると、例えば、一番上に「柱となる専門教育の基礎知識・技術の習得」という、「習得」という言葉があります。そして、その下には、「実践的教育」ではなく、「実践的教育の推進」と書かれています。教育をすべきだが、その推進をすればいいというような、「推進」というような言葉が多い気がします。学びとしては、「実践的教育」と言い切っていいような気がしています。「推進」という言葉を付けているところと付けていないところの理由がよくわからないと思いました。
- ・審議内容ア「(2)教員の資質向上」のところですが、教員が主語だと思うが、ここに書かれているような「研修を充実させる」というのは、要は先生の質の向上を研修の充実でできるのか。どういう教員の資質向上を図ると、生徒の教育に繋がれるのかという繋がりがよくわからないと思いました。どういう先生であるべきなのかという対応というか、そういうものも少し必要になるのではないのかという気がしました。

○川田委員

- ・審議内容ア(2)は、教員の資質向上なので、先生にお願いしたいことが書かれていると思いますが、岸田委員が話されたように、もう少し文言を整理した方がよいかという気がします。

○岸田委員

- ・1番言いたいのは、最新技術の指導法や探究型の授業展開についての研修を充実させれば、教員の資質が向上するのかということです。育成したい生徒を作るためには、それをやれば教員の姿勢が向上してできるという、その繋がりがよく見えないということです。

○横田委員

- ・「育成したい生徒像」や「育成したい生徒像に必要な学び(方向性)」を分類している表(資料5)の中に、「教員の資質向上」や「施設・設備の整備」というものを入れ込んでしまっているので、整合性が取れていないのではないかと思います。
- ・「教員の資質向上」や「施設・設備の整備」は、もう1段階後のところで出てきてもいいのではないのかという気がします。

○事務局

- ・第1回審議会で提示した審議内容、検討の視点に、皆様方の意見を降ろした時に、「育成したい生徒像」を(1)から(3)まで通して、審議内容アの部分のところに通していこうかと考えました。しかし、審議内容ア(2)(3)を空欄にしたのは、教員に関わるということと、ここは1回空欄にして、学びの方向性の中で生徒像に関わっていくものということでこのような配置にしました。まとめ方については、また検討をさせていただきたいと思います。

○川田委員

- ・こういう生徒を育成したいから教員にはこういう資質を向上させないといけないというような、そういう繋がりが見えるような形にさせていただけるといいのかなという気がします。
- ・施設・設備のところも同じかなと思います。

○上野委員

- ・審議内容ア(1)の「柱となる専門性を身につけた人材」というところは、もう少しわかりやすく表現しないと、「柱ってなんだ。」という感じになってしまうと思います。個人的には、例えば、「専門基盤の確立」ということだと思うので、「専門教育における基礎的な知識、技術の習得」であったり、「学びの土台としての理論とか方法を体系的に身につける」といったようなことをもっと上に書いてもいいと思いました。
- ・「基礎知識・技術に裏付けられた問題解決能力」というところも、「裏付け」という言葉がいいのかなと思うが、要するにこれは持っていて問題なくできるということだとは思うんです。表現の問題だと思うが、スローガンを出す時には、分かりやすさというのは大事なかなと思います。
- ・構成については、「基礎」、「実践」、「発展」のような形で、常に3本柱みたいな感じで意識して「育成したい生徒像」は出した方が分かりやすいかなと思っています。例えば、「基礎」だったら「専門基盤の確認」ですし、「実践」ということ考えると、「地域産業と結びついた実践的学び」とか。「発展」としての「未来志向と専門家を進化する」とか「課題解決能力」といった形で、「基礎・実践・発展」のような形に構成した方が、どの範囲までやればいいのかということに対して、選択はできるかなと思います。
- ・バラエティがあって、どれかをやればいいというような表現ではなくて、基礎があって、そして実践があって、そして発展がある、という構成の方が先生方には伝わりやすいかなと思います。
- ・すごくよくできる生徒と、あまりよくできない生徒がいると思います。基礎としてはこれぐらいまでは減らしておこうという生徒に対しては、基礎だけ。エキスパートレベルまでできる生徒は、発展も求めるみたいな形にまとめた方が、学校教育の現場を考えるとやりやすいのではないかと思います。

○事務局

- ・今お話があったような観点も含めて、この後まとめていきたいと思います。

○奥田委員

- ・「育成したい生徒像」というのが、専門教育を学んでいる人たちという縛りがあると思いますが、もっと広い、これからの社会を担っていく人を育成したいという基本的なところで、「人間と社会の理解」というのがどの分野にも必要だと思います。この産業教育の分野では、特にそれは入れなくていいということでしょうか。
- ・福祉と家庭はそこのところを入れたい分野です。審議内容ウ(2)の「育成したい生徒像に必要な学び(方向性)」のところに、「教養教育」という言葉が入っていますが、この教養教育の中に多分倫理であるとかも含まれているのではないかと思います。その倫理というのがないと、仕事をしていくにあたって、コンプライアンス問

題に関わっていくときに、基本的に自分たちの仕事の中の倫理というのが常に求められると思うので、そういうところも専門教育の中で全く触れないよりは入れた方がいいと思っています。しかし、それは風呂敷を広げすぎなのかというところを、皆様のご意見を伺いたいと思います。

○川田委員

- ・個人的な意見として、人としての基盤になると思いますので、重要なところではないかと思います。

○横田委員

- ・奥田委員と上野委員の御意見も踏まえて、審議内容アとイの分け方が、不十分ではないかと思いました。倫理面という側面も基盤のところに入ってもいいでしょうし、上野委員の段階的なところもあるかと思っています。審議内容アは比較的知識や技術的な部分を指していると思いますが、審議内容イは、思考力や開発能力と、コミュニケーション能力というのが、少し混ぜこぜなのではないかという気がしました。そのため、さらに2つに分けてもいいのかもしれないというような感じは受けました。ただし、全部あげると細切れになってしまい、段階的な分け方と組み合わせるとより細かくなってしまいうところもありますが、1つの意見として話をしました。

○村木委員

- ・横田委員のご意見をお聞きして、私もあまりにもたくさんあって、優先順位はどうなっているのかと思ったところです。
- ・教育界のことはよくわかりませんが、こういうものを出す時に、「こういう育成したい生徒像なんですよ」という1つキャッチフレーズが欲しいと思います。そのキャッチフレーズを出す時に、優先順位が明確ではないと出せないと思います。
- ・上野委員や横田委員の御意見を聞き、並列で、色々並びすぎてしまっているという感じがします。1番大切なものは何なのかという順位付けをした方が、ずっと入ってくるものになるのかなという感じはしました。

○川田委員

- ・確かに並列になっているという気はするので、もしここがやはり重要だという、皆さんからの御意見をいただき、コンセンサスが取れるようであれば、個人的なご意見でも構いませんので、何かご意見いただければと思います。

○川田委員

- ・専門高校なので、「専門教育の基礎知識・技術の習得」というのは重要で、ここは1番の基本だと思います。

○村木委員

- ・「育成した生徒像」を3つにまとめられるのではないかと見ていました。
- ・1つは、「専門性と応用力、課題発見解決力」のようなプロとしてと言いますか、これから社会に出ていく1人の社会人としてのコアスキルのなもの。
- ・2つ目が、それをサポートする「コミュニケーションスキル、デジタルスキル」みたいなもの。
- ・3つ目に、「静岡県への愛着」のような、少し広いところで掴んだようなスキルと言いますか、メンタリティみたいなものに分けられるのかなと思って拝見しておりました。

○横田委員

- ・村木委員の御意見がすごいなと思いました。1番目の部分は、もしかすると専門の知識という部分と、その思考力や開発力という部分是一緒のコアスキルとも取れますが、分けてもいいかなと思うと4つぐらいになってしまうのかと思いました。
- ・村木委員の3つ目の静岡県への愛着というか、地域への愛着みたいなものが私は思いつかなかったため、新鮮に感じました。「地域への愛着」というのは、産業教育では前面に出していくのは必要なところでしょうか。

○村木委員

- ・1つは、この「育成したい生徒像」の中にその言葉があったということ。
- ・それと、静岡県の子供たちなので、一旦は県外に出たとしても戻ってきてほしいという気持ちがあります。そうしていただくためには、静岡県の良さというのを学校時代に体得してほしいんです。そういう意味で、「静岡県」という言葉を入れたいなと思ったところです。

○川田委員

- ・いただいたご意見としては、内容的には大体網羅されていると思ってよろしいですか。
- ・あとは整理の仕方であるとか、言葉のところであるとかを、事務局の方でもう少し練った方がいいのではないかとということでもよろしいでしょうか。

○上野委員

- ・個人的には「深い学び」って何なのかとってしまうので、使ってもいいですが、あんまり抽象的な言葉をたくさん使わない方がいいかなとは思っています。
- ・個人的には、そのような言葉を1つ2つ使うのは構わないと思いますが、使いすぎると、耳障りはいいいけど何が言いたいのかわかんないという風になってしまうのではないかとと思っています。

○事務局

- ・論点1ののところを振り返らせていただきます。奥田委員が言われた「人間と社会の理解」、いわゆる前回で言いますと「生活力」といった言葉でご意見いただいたところをもう少し強調すること。
- ・それから「推進」とか、いい加減なところで止まっているような表現のものや、最後に上野委員から発言があった抽象的な表現といったところを見直すご意見をいただきました。ありがとうございました。事務局からは以上です。

(2) 論点②

「育成したい生徒像」、「育成したい生徒像に必要な学びの方向性」を踏まえた今後の専門高校及び専門学科の在り方について

○川田委員

- ・続いて、論点2に移らせていただきたいと思います。
- ・論点2は、「育成したい生徒像」、「育成したい生徒像に必要な学びの方向性」を踏まえて、「これからの時代に対応できる学科改善の在り方と少子化に伴う専門高校等の適正な整備」について、御意見をいただきたいということになっています。
- ・まず事務局の方から追加説明をしていただきます。資料6と7の説明について、よろしくお願いします。

○事務局

- ・次第資料7ページに資料6、8ページに資料7があります。
- ・資料6については、静岡県の公立高校が直面している課題をまとめたものになっております。主な課題として、少子化に伴う中学生の減少。それに伴う高校の小規模化と専門高校等の維持の困難さについてまとめてあります。そして、地元産業の人手不足と生徒・保護者の普通科志向のギャップが挙げられています。これは、専門学科の魅力が十分に伝わっていないことなどが原因かなと考えています。また、高校生自身も卒業後に地元で働きたいと考える割合が低く、人材の県外流出も課題となっているところです。
- ・資料7です。これらの課題に対して、専門学科の魅力向上と、それから「普通科×専門学科」や「専門学科×専門学科」の再編統合を含む柔軟な学校整備について、協議の視点として考えていただければという資料になっております。
- ・資料7の1つ目の「魅力的な専門学科等の在り方」では、学科改善について、社会や企業のニーズに対応した新しい学びを取り入れ、学科内容、それから全面的にそれらを見直す視点が必要になるかと思います。企業や大学と連携した高度な学習機会も考えられると思います。委員の皆様方からいただいた学びの方向性の中に、地域産業の企業の視点を踏まえる、そういったものを、例えるならば、県内の主力産業である衣料品それから化粧品産業、そのようなところの人材確保を目的に考えて、科学分野の科目を持つ農業や工業、それから家庭の学科といったところからまず改善していったら、そういった人材が生まれるのではないかな。それから、これらの学科と普通科との組み合わせで理系女子の増加を狙うということも考えられます。この普通科というのは、大学進学後にこれらの企業へUターンで帰ってくるといったことも想定しての例えになっております。また、成長産業と直結した新学科の開設もあるかなと思います。極論ですけども、就職先の企業を担保し、その産業に特化した学びを行う学科新設といった発想もあるかと思っています。小規模化が進む総合学科においても、ゼネラルスキルを養う面からも、専門性にとらわれない科目選択、それから教育内容を見直し、地域によっては専門学科の改編も考えられるかなと思っております。
- ・2つ目です。適正な専門学科等の整備については、小規模な普通科と専門学科の再編統合、そういったもので多様な学びの機会を確保できるのではないかなと考えています。普通科の生徒に専門的な学びを提供したり、両学科の生徒が共同で探究学習を行うクロスカリキュラムを実施することで、学習の幅を広げられることも考えられます。また、専門高校の施設・設備を共有利用することも可能になり、キャリア教育の1つになるかなと思っております。効果の想定としては、資料内に考え方として、一部記載させていただきました。また、「専門学科×専門学科」の再編では、複数の小規模な専門高校を統合することで学校規模を拡大し、より多くの小学科、いわゆる工業だったら、機械や電子、建築、土木、そういったものが多く設置できることも期待できます。それにより、教員が確保できたり、最新の技術、機器を導入する質の高い専門教育が提供できると考えています。それから、異なる専門学科の組み合わせについては、経営的視点を取り入れた学びなどが応用によってはできるかなと考えています。例えば、「福祉×工業」、それから「農業×家庭や商業」。そのような組み合わせで、消費者の視点それから経営的視点を取り入れた学びも実現できるのではないかなと思っております。同一学科の統合では、小学科を複数設置することで、どこでも専門性の高い分野の学習が可能になることが考えられます。これは例を挙げますと、参考資料35ページを見ていただければと思います。県内公立高校の工業科の分布と専門分野について示されているものになります。県内を4ブロック、西部、中東遠、中部、東部という大きな括りで分けた時に、西部、中部、東部には建築土木を持つ学校があります。例えば、中東遠、それから志榛地区の掛川工業高校、島田の辺り、島田工業高校へ行けば建築土木がありますが、掛川工業高校にはない。それぞれブロックで、その地域の生徒がこういった学びをしたいって言った時に、こういった学校が一緒になるこ

とで、その地域で、どの地域というか、西遠でも、中東遠、志太・榛原地区でも、建築土木を学ぶ1つ大きな学校ができるといったまとめ方もあるんじゃないかという、これは1つの例になっております。それ以外に、農業、商業等もあります。このあたりは参考資料になります。

- ・事務局としては、委員の皆様方からいただいた、この「育成したい生徒像」とその学びの方向性を具現化するために、学科の改善や学校体制については直結したものになるかと思っております。例えば尖がった意見であったり、今、事務局が示させていただいた資料7のような形の方向をより現実的にするために、今回はご意見をいただければと思っております。

○川田委員

- ・論点2では、学びの方向性を具現化するための学科や学校の体制について、具体的なお意見をいただきたいと考えています。
- ・資料7を検討の視点とし、企業や大学との連携をより深めた学科であったりとか、例えば、東部地域のファルマバレーに関しては、福祉と工業の連携も考えられると思います。また、学科体制の整備におきましては、普通科にも専門学校の学びを取り入れたキャリア教育を提供できるような普通科と専門学校の組み合わせであったりとか、県内のどこに在住していても平等の専門教育を提供できるように同じ学科を集約した拠点校の考えなど、例がいくつか出されています。
- ・審議会で提言する学びの方向性について具現化するために、学びの体制や環境面から魅力的で未来志向の専門高校についてご意見をいただければと思っています。

○横田委員

- ・確認です。資料5の審議内容ア・イとウの関係ですが、アがウの(1)とイがウの(2)にほぼ適合しているというようなイメージでよろしいでしょうか。

○事務局

- ・このような学びを行うにはどのような学科が必要か、どのような学校の体制が必要かということで、このような形で当てはめました。

○横田委員

- ・審議内容アとイから抜粋されたものが、審議内容ウ(1)(2)に対応しているというイメージでいいんでしょうか。

○事務局

- ・審議内容ウ(1)(2)の両方に共通するような内容もあるかと思いますので、厳密に分けることは少し難しいかなと思います。このようなことをやるには学科の関係かな、このようなことをやるには学校の体制かなという、学科改善か学校の作り方かという広い意味で御意見をいただければと思っています。

○横田委員

- ・表の整理として、せっかく第1段階で、「育成したい生徒像」と「育成したい生徒像に必要な学び」でうまく整理してあるので、次の段階との整合性がないと見る側が理解しづらいかなと思い、質問をさせていただきました。

○横田委員

- ・専門高校といろんな違う専門高校の統合を考えているということは、物理的にいうと統廃合というイメージになるのでしょうか。

○事務局

- ・資料6をもう1度ご覧いただければと思います。
- ・再編や統合の必要性というのは、先ほども説明をしましたが、中学校卒業者数の減少というものがあります。現実的に数値で書かれているように、令和6年から令和20年にかけて、約37%減少していくということで、例えば、この人数のまま現状の公立高校全日制90校を置いていくと、各学校の学級数は1学年平均4.84学級ということで、5クラスを切ってしまうような学校ばかりになってしまいます。そういった中で、やはり統合や再編整備の必要性、要は学びの保障という面では規模を大きくすることが生徒のためにもなっていくということで、このような資料を提示させていただきました。

○岸田委員

- ・先ほど、論点アとイのところで、「育成した生徒像に必要な学び」、特に「教員の資質向上」という案がありましたが、教員の質の向上と量的な問題もあると思いますが、先ほど事務局から、クラスが少なくなっていくと教員の人数が少なくなってきた、我々が審議内容アとイで言っている「育成したい生徒像」に見合うような教育ができないというように聞こえました。この点について、どのくらいのクラス数でないと、我々がここで示させていただいた「育成したい生徒像」に見合うような先生が必要となるのかということがよくわかりません。生徒が少なくなるから、4.7クラスだとまずいと言われても、なにがまずいのかよくわかりません。少数精鋭で、先生がたくさんいて、個性豊かに教育を受けられた方が生徒としては非常にいいような気がします。
- ・一方で、国が定めるような教員数というのがあるのかわかりませんが、そういうものと合わせると全体最適というものが出てくるのか、そのあたりがよくわからないので、人数が少ないから学校をまとめなくてはいけないという理由がよくわかりません。

○学校づくり推進班(小粥室長)

- ・今のご質問についてお答えいたします。まず、少数精鋭で教員が多ければもちろんいいですが、教員の数は国の法律で決まっております。いわゆる「高校標準法」と呼ばれるもので、生徒の収容定員に応じて教員の数が定められています。生徒が多ければ当然教員も多く配置されますし、少なければ当然教員も削られるということになります。もちろん、学科とかで、例えば工業の学科と普通科の学びとでは、必要な教員数は変わってきますので、必ずしも全ての高校において教員数とクラス数が比例しているというわけではありませんが、教員を多く配置していい教育をしようと思うのであれば高校には一定の規模が必要となります。
- ・県教育委員会としては、適正規模を1学年6から8学級と現在規定しています。6から8クラス規模がありますと、国・社・数など多くの科目で一定の数、複数の教員が配置されて、それぞれの専門性に応じた授業もできますし、学校経営もうまくやっていけるというように考えております。そのため、なるべく6クラス以上の学校を作っていきたいということです。
- ・先ほどの説明で1点、修正いたします。1学年4.84学級というのは、現在の学級数になります。この後、子供がどんどん減っていきますので、このまま放置していくと、例えば3学級とかになり、教員の数も大きく減少して、教育にいろいろな支障が出るのが懸念されています。

○岸田委員

- ・例えば専門高校のところで、「育成したい生徒像に必要な学び」の審議内容ア(2)で、「教員の資質向上」で、先生方は研修や教える以外の自分たちの勉強も相当しなければならないと思いますが、そのあたりも含めて考えても、6から8クラスであれば、先生方が研修をしても問題ない、専門高校でも大丈夫だというように我々は考えてもよろしいでしょうか。

○事務局

- ・はい、そのようにお考えいただいて大丈夫です。

○齋藤委員

- ・少なくとも高校の分野は、8科目ぐらいあると思います。その科目を担当する先生が1人ではかなり厳しいでしょう。最低2人となると、それだけで16人の教員が必要になってきて、その先生方をどういう風に教室に配置するかということを考えれば、何クラス必要かということが出ると思います。
- ・実は今、我々大学の中でも改造ということを考えていますが、学生数を減らすと教員数も減ることが問題になります。ある程度の規模の学校を用意することになると、少子化を考えると、農業、工業、商業を単独で置くというのは非常に難しいのではないかと思います。ある程度一緒になった中でそれぞれの先生方が役割をうまく決めていくということが今後どうしても必要になってくるのではないかと思います。

○川田委員

- ・資料7に記載されている「専門学科×専門学科」の組み合わせについて、非常にいいのではないかと考えています。
- ・「普通科×専門学科」も新しいというか、今までにこういう組み合わせがあったのかわかりませんが、専門学科が普通校に入ることによって、いろんな新しい刺激があって面白いのかなというように感じています。

○横田委員

- ・普通科と専門学科とか、いろんな別の専門学科同士というのは非常に興味深いことだとは思いますが。
- ・今も総合学科がありますが、総合学科とこの「専門学科×専門学科」の違いをどういう風に出そうとしているのかが区別がつかないのですけども。

○学校づくり推進班

- ・専門学科と総合学科の違いについて、説明します。
- ・総合学科は、まず1年生は基本的に同じような共通の科目を受けて、その中で様々な自分の適性とか興味に応じて、2年生、3年生で専門的な学びを受けるということになります。一方、専門学科については、高校入学の段階から自分は工業をやろう、農業をやろうと決めて入学しますので、3年間全て専門的な学びを受けることになります。
- ・生徒が自由に選べる、高校に入ってからゆっくり選べるという意味では、総合学科の方に1つメリットはありますが、逆に専門的な学びを3年間しっかりみっちり受ける生徒と、2年間しか受けられない生徒ということで、やはり専門性には差が生じてしまうと思います。例えば、資格をしっかり取れるでとるか、そのような点では、やはり専門学科の方に分があると言いますか、その後の就職等を考えた際には、専門学科に通うというのは1つの方法として有効であろうかなと考えています。

○横田委員

- ・その上で、この「専門学科×専門学科」というのは、総合学科とは違って、単に2年生段階から専門に分かれるのではなく、専門のカリキュラムが噛み合うというか、組み合わせられるというようなイメージでよろしいでしょうか。

○事務局

- ・はい。「専門学科×専門学科」はそのような形だと思っていただければ大丈夫です。

○横田委員

- ・専門学科の組み合わせは、興味深いですが、カリキュラムや授業単位とかでみると無数の組み合わせになると思います。何かモデルケースのようなものを想定しておかないと、実現性のあるものにならないのではというような気がしました。

○事務局

- ・県の施策で、先ほど1つの例を挙げさせてもらいましたが、東部地区ならば医療・医療機器、ファルマバレー等があり、中部地区であればフーズ系、食品系。それから西部へ行けばフォト・光産業。例えばそのような地域産業を1つ軸にという考え方もありますし、横田委員の言うように、本当に組み合わせはかなり多くあるかなと思っています。
- ・そのような中で、やはり「育成したい生徒像」、「静岡県らしさ」であるとか、そのようなところを 意識したのになると非常にありがたいなという風には思っています。

○川田委員

- ・最終的に高校の統廃合みたいな話もせざるを得ないかなとは思うのですが、地域的に限られるのですよね、近い高校同士しか一緒にできないとか。そんなことはないですか。それとも、別にそこは自由に考えてもいいですか。

○学校づくり推進班

- ・今、地域協議会というのを開催しておりまして、その中で、例えば東部の高校と西部の高校をくっつけて、それを中部に置くというような、そのような話はまだ今のところ出ていません。
- ・これまでのそれぞれ学校で行われている学びの継続性と言いますか、そういったところを考えると、正直難しいかなと思う面もございますが、絶対にできないというわけではないのかなと思います。そのようなことも含めて、ご意見いただければありがたいと思います。

○齋藤委員

- ・資料6に、アンケートの結果で、普通科志向の中学生70.5%、保護者が63.1%という数字があります。その一方で、専門高校ですとパーセンテージが低い。これは、大学進学ということをもし意識しているのであれば、これこそ静岡県も実は大学進学者が減少しているということは非常に問題なので、いわゆる「高大連携」というところを、静岡県ならではのところで、普通高校ではなくても、専門高校からも高大連携をして、推薦なり指定校なりを活用して大学に入学できるということになれば、普通高校と同等の魅力が出るのではないかなと思います。

- ・ただ一方で、就職というところに繋がっていった時には、専門高校の方が有利だということであれば、そこはまた考えなければいけないですが、むしろ大学まで来ていただいて専門的なことを勉強して、そして就職するという、高校から大学に来る段階で就職がある程度保障されるような、そのような特殊な仕組みを作れば、それこそ「高大連携」によって就職までできるよということが岸田委員も望むところではないかと思います。

○村木委員

- ・私も就職というところを視野に入れた方がいいのかなと思っています。
- ・先ほど事務局からご説明いただいた西部の方は、西部の産業に近い専門分野を磨いていく。もし可能であれば、その西部の企業さんと実践的な教育みたいなことができて、最終的に就職まで担保できるような学びの場みたいな形になっていくといいのかなという風に思っていました。
- ・要は、ここだけで終わらせるのではなくて、その先まで見通せるような形でその仕組みができてしまえば、生徒側も、そして親の側も高校に行かせるモチベーションというのが作れるのかなという風に感じました。

○西村委員

- ・就職の話も出てきましたが、教育のことを考える時に、生徒たちの卒業後2、3年の話と、一生働いていくのかによって、どういう職業観や価値観を育成していくのかというのは、全然違う話だと思っています。この審議会では、卒業後2、3年ぐらいのところを優位になるような形の教育ということだったでしょうか。

○川田委員

- ・前半の議論のところでありましたが、静岡県に愛着を持って、静岡に戻ってきてもらったりとか、静岡を盛り上げていくような生徒さんの育成も重要ではないかというような話があったので、長いスパンであるというように私は認識しています。

○西村委員

- ・「学校だけでは届かない」時代に

今の高校生世代は、学校での学びだけでは情報が足りないと感じています。自らSNSやYouTubeで情報を得る一方で、時に偏った情報や極端な論調にも触れています。だからこそ、学校という閉じた場ではなく、“周辺の大人たちのネットワーク”が連携し、複数の価値観や選択肢を示していくことが重要だと考えています。

- ・尊敬できる「大人の存在」

少し脱線しますが、今の高校生たちは「自分たちの未来は暗い」といった漠然とした閉塞感を抱えている子も少なくありません。政治や社会への不信感もあります。そんな中で、彼らがリスペクトできる存在が身近にいるかどうか。YouTuberや海外の活動家に憧れを持つ一方で、自分の周りに“憧れる大人”がいないというのは、非常に大きな問題です。教育現場にこそ、そうした「言葉の力」や「生き方」を示せる大人が必要だと感じます。

- ・「どう生きるか」を支える産業教育へ

先ほど先生方の研修についてのお話も出ましたが、研修制度の整備だけでは十分ではありません。“産業教育”という名のもとに、ただ技術や業界知識を教えるだけでなく、「どう生きるか」「なぜ働くのか」といった人生観や価値観を共有する教育こそが求められているのではないのでしょうか。この点について、教育委員会が今どのように取り組まれているのか、ぜひお聞かせいただきたいです。

- ・外部講師依存ではなく「関わる大人のコミュニティ」

また、よく“外部講師の活用”が話題になりますが、単発的なイベントで終わってしまうことが多く、継続性や浸透

性の面では課題も多いです。本当に必要なのは、一部の“特別な外部人材”に頼るのではなく、地域に関わるさまざまな大人たちが、息長く、日常的に関わる仕組みです。これは学校間連携ではなく、“社会の連携”としての産業教育の形かもしれません。

・マインドセットの議論を丁寧に

今回の審議内容自体には異論はありません。ただ、最も難しいのは、若い世代の“マインドセット”をどう形成していくか、という部分です。

これは、教育委員会や先生方だけでなく、我々大人が「どう関わるか」「どう語るか」「どう背中を見せるか」が問われていると思います。教育の外側にいる立場としても、できる限り協力させていただきたいと考えています。

○事務局

・非常にありがたいご意見ありがとうございます。

・基本的には、教育は教育推進基本計画に沿って、全体的にはこういった生徒を育てていこうといった学びの方向性という大きなもの、そして具現化するための細分化した項目等があります。産業教育についてもやはり落とし込んでいかなければいけないということで、今後の参考にさせていただきたいと思います。

○西村委員

・その教育推進基本計画に沿ってこれからの子供たちの教育ができるのかどうかということも正直わかりません。誰が変わらなければならないのか、カリキュラムなのか、教育現場の何が変わらなければならないのかという議論の方が実は必要なのかなと思っています。

・私も静岡県に愛着を持ってもらうということは大事だと思っていますが、それは地域ごとに独自でオリジナルで考えていく話ではないでしょうか。

○岸田委員

・産業界としては、先ほど事務局から話がありましたように、静岡県の中でも光輝くような事業をしている企業も結構多くあります。東部、中部、西部のそれぞれでというお話もありましたが、先生が教えられないような、例えば工業高校であれば、素晴らしい職人もいます。そういう方を見て感化されていくということも実際あるのかなと思います。そういうためにも、産業界がお手伝いをしながら、ぜひ先生が教えるだけではなく、地場の産業界と連携を取ったり、素晴らしい技術を持った方と繋ぎ合わせて教育をしていくということもできるのではないかと思います。AIなどを含めて最先端の方もいらっしゃる中で、県は教育の幅を広げていく中で、産業界を活用し、逆に我々は静岡県の中にいい企業があるということを生徒さんに思ってもらって、静岡県に残ってもらうためのお手伝いができればという風に考えている次第です。

○村木委員

・私も西村委員の言われたことがすごく重要だと思っています。最初の方で自己理解みたいなものを入れてほしいと申し上げたところ、それから奥田委員が言われた倫理観みたいなものも多分繋がってくるものだと思いますが、そこは手を入れるのが難しいところで、どのようにやるのがいいのかと言われたら、行動レベル、現実的なものから経験していただいて、その中から汲み取っていただくというやり方だと思います。

・それが、今、岸田委員の言われた通りのことだと思いますが、実は、そういうことをやる目的として、マインドセットを変えてもらうことがあるんだよということを先生方に理解していただいた上でやっていただく必要があるのかなという感じはしています。ただ、なんとなく、実践教育をやって、表面的に技術や技能が身につけばいいんだよ

ということではなくて、その先に、その生徒たちに期待するものがあるということを認識した上でやっていただくのがいいのかなという風に思っていました。

○齋藤委員

- ・今、聞いていて思うのは、就職する魅力というのか、この会社のこの仕事にこれだけのプライドがあるということ
をいかに高校生段階で植えつけるかということでしょうか。それは中学校かもしれませんが、ドイツではマイスター制ということで、その技術職というのはすごく大事にされていますが、日本はなかなかそうではないですね。そのあたりのところをどう変えていくかというのは、静岡だけの問題ではないと思いますが、高校での教育でどこまでそれを伝えられるかということかと思います。
- ・その一方で、今の若者の動きというのが随分変わってきていると感じています。我々大学ですと、いわゆる通信制の高校、N高、S高あるいはZ高校ですかね、そしてさらに大学にも通信制のZEN大学が3000名も集めるということで、世の中の全体の動きが変わってきています。そういう中での静岡における専門高校の教育の在り方ということ、もう一度考え直していかなければならないと思います。
- ・その中でやはり1番大事なことは、ポリシーと言いますか、人間教育と言ったらいいのでしょうか。なぜこれをやらなければならないのかということだと思いますので、それは専門学校に限らず、普通高校もそうかもしれませんが、静岡ならではの、教育の地盤みたいなのところがうまく広がっていけばいいのかなと思います。

○川田委員

- ・例えば、専門学科を掛け算していくところで、1つは、工学系と商学系を組み合わせると、探究学習のところで、実際に工学製品を売るところについて経営的な部分を商学系の生徒さんが行うとかの学びができると思います。実社会の中で生徒さんが具体的な課題、コミュニケーション能力とかを磨いていくというのが現実的な線かなという風には感じているところです。
- ・普通科の生徒さんと専門学科の生徒さんが組み合わさった場合には、受験勉強だけではなくて、実社会のことを専門学科の生徒さんから教えていただくと、普通科の生徒さんにも波及効果があると思うので、こういう組み合わせも非常に面白いのかなという風には感じているところです。

○岸田委員

- ・資料7の(1)魅力的な専門学科等の在り方のところは、これからの将来、生徒にとってどういうものかいいのかと考えて我々は議論しているのに、急に(2)では、少子化なのでこういう組み合わせしかないという状況になっています。少子化というのは後にある話で、まず我々としては、専門学科と専門学科、それから普通科と専門学科を一緒にして学んでいくというのは前向きな話としてすごくいい話かなと思いますので、川田委員が言われたような話を全面的にやりながら、でも最終的には少子化というものがあるので、それにはこう落とし込まなければならないという部分はあると思います。最初の議論のところで少子化を考慮しろという話になってしまうと、後ろ向きの議論になってしまう気がするので、まずは我々としては生徒にとってどういうのがいいのかというのを全面的に議論させていただいて、でもそうは言っても少子化があるので、こうだよねと言って、最後は落としどころとしてあるのかもしれませんが、一生懸命議論していたのが急に少子化で、結局それしかないのかという話で終わってしまうような気が聞いていてしたかなと感じました。

○川田委員

- ・私も岸田委員のおっしゃられる通りかなという風には思います。

○奥田委員

- ・専門社会人としてすでに活躍している方の話を聞いて、生徒たちが憧れて、私もなりたいと思わせる場を作ることがすごく大事だと思います。
- ・今、大学でも、特に私のところは専門職教育なので、専門職として就職をして、その後こんな風にキャリアを築いていますという話をキャリア教育としてだけではなくて実習教育とか様々なところでやっています。専門職に就いた場合に、どういうライフコースを歩むのかということについて、意外と学生は知らないです。標準的なものしか知らなくて、転職を繰り返しつつ、最初に思っていたところとはかなり違う働き方をしているというようなことも、実際の例として聞いていくと、自分は今すごく狭い分野で学んでいるような気がしたけど、すごく広い分野に繋がっていく1つの道なんだということが見えてきます。次にどういう風にキャリアをつくっていくかということを考える上で、専門高校で学んでいるから狭いではなくて、それがたくさんある選択肢の中の最初の1歩を踏み出しているということを、専門高校の生徒さんには、ぜひ自分は選択の第1歩を踏み出したけど、たくさんまだ先に道が開けているということも知ってほしいです。
- ・実際に今自分は歩んでここまで来ているよという先輩たちの話を聞く機会として、介護福祉士養成校であれば、例えば静岡県老人福祉施設協議会では、ぜひ施設でどういう仕事をしているのかを高校生に知ってほしいから、いつでも職員を派遣します、その高校の卒業生を施設職員の中から選抜してお送りすることができまうということをやっているし、高校生のところにもぜひ行きたいですと言っていることをうまく活用していくということで、専門教育を続けていけるのではないかなという風に期待しています。

○上野委員

- ・結構難しい問題をはらんでいると思っています。統廃合という観点から言うと、それは避けられないという中において、どのような形で指針を示すのかということが求められているのかなと思って、伺っていたところです。
- ・どう答えたらいいのかなと正直思っていたところですけども、やはり地域のありきたりの答えしか今回は言えませんが、地域の特性を考えると、東部、中部、西部において、再編の範囲と言っても限られるのかなとは個人的には思っています。
- ・商業で言うと、例えば中部と言っても、静岡商業高校と島田商業高校は地理的にも離れていますから、これで統合しようみたいなことはできるのかなというところもあると思います。静岡県は横に長いので、そのように考えた時の統合のあり方というのはかなり慎重に考えないといけないと思います。
- ・あと、例えば焼津水産高校がどこかと統合できるのかというと、地理的にもというのはあるので、グランドデザインがあった上で話を展開した方がいいかなとは個人的には思いました。
- ・一方で、一部ミックスしていくというアイデアは非常にいいと思いますが、高校の生徒さんの利便性という意味ではどうなのだろうかと考えたりしたところです。

○川田委員

- ・岸田委員がお話しされたように、理想的な教育はどうあるべきかという話をした上で、後ろの方に、生徒さんが減っていくというのも見据えつつ、統合再編をしても対応できるような理想的な教育ということを模索していくと

というのが一番いいことかなという風には感じているところです。

○奥田委員

- ・専門高校への進学について、特に保護者が受験に不利ではないかというようなことで、専門高校に行かせたがらないような傾向があるということに関して、指定校推薦、指定校でなくても、今、大学の方も、本当に定員割れが続いている大学も多いですので、専門高校と大学を繋ぐことはそんなに難しいことではないと思います。
- ・産業界の方からもぜひ来てほしいという中で、高校の先生方も困られているかもしれませんが、大学に繋げることはいくらかでも可能であるということをもっと発信することもできますし、そのための情報提供だったら大学側からもできると思います。

○川田委員

- ・専門高校の生徒さんの就職はかなりいいのではないかと考えています。資料6に、産業人材が足りないと県内企業の46%が感じておられるので、就職は非常にいいということも1つのアピールポイントになるのかなという風には思っています。

○川田委員

- ・それでは、2つの論点について本日の協議は、ここまでにさせていただきます。

4 閉会

- ・ご審議ありがとうございました。いただいた意見を事務局の方でまとめさせていただきます。
- ・次回の審議会は12月頃を予定しております。12月の審議会では、この4回までにいただいたものを中間まとめとして最終的な答申に近づけたものをご提示して、また振り返ってご意見をいただいて、修正していくといった会にしたいと思っております。